創刊の辭

道は一筋である。廣い道の上には猶幾すぢもの徑が迹づけられてゐる。その孰れを通らうと人々の心ごゝろである。國語愛に發して日本精神美の闡明に到る。目ざすところは此の一筋にかゝつてゐる。この道は既に古往今來、幾多の先覺が通つて行つた。けれど今なほ石のごろ〳〵した所がある。草のもぢや〳〵した所がある。さうしてまだ足迹の全く印せられない處女地さへもある。近頃は急激に人通りが殖えた。多くの人がいろ〳〵の姿をして行く。ある者は踽々として行き、ある者は颯爽として行く。旗押し立てた大たむろの連衆も見える。われ〳〵も亦この道を辿る旅人の小い群である。さゝやかな影ではあるが、分相應の足どりで進みたいと思ふ。

國文學の分野は廣い。研究の態度・方法、それは各自の個性に委すべきであると信ずる。——われ〳〵の祖先は「言」のうちに「靈」を思念したと云ふ。國語に對する熱愛が、凝つて生じた詞花言葉には、たとへ深淺濃淡の差異こそあれ、等しく魂の故郷を語る民族精神の結晶がなくてはならない。そこに磅礴する祖國本然の相を把捉し解明するのが、われ〳〵國文學

學徒の使命である。

更に惟ふ。昨日の精神を享受して今日の精神に甦生せしめる。今日の精神を樹立して明日の精神に進展せしめる。こゝに研究から實際への階層が展開されてゐるのである。「學」としての國語國文學の攻究は一日も忽せに出來ない。それと同時に國語教育に關する實際的な諸問題も亦當面の研究對象である。わが學園にあつては、その成立の本質上、特にこの關心が重要性を帶んで來るのである。

今や、斯學の活躍は空前の盛觀と云はれてゐる。この間に伍して、微力ながらわれ〳〵は敢てこの「國文學攷」を擁して立つた。その眞意と使命とは今更呶々するを要しないであらう。

道は一筋である。茲に力足をふんで發程の途に上る。

昭和九年秋十月

廣島文理科大學內

國語國文學會

代表者　鈴木敏也